

---

# ヤッテクル

紫吹 零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ヤツテクル

【コード】  
N6610U

【作者名】  
紫吹 零

【あらすじ】  
鬼が来る

**(前書き)**

ホラーですが、ホラーじゃないかもしれないかもしれません。  
短編ですので、それでもいい方は、どうぞ読んでください。



「……まあ、いつか。行くぜ」  
ニヤリと笑って答えた新稲と一緒に、私たちはそのまま佐島神社に向かった。

夏真つ盛りだからか、蝉の声が凄くうるさい。だけど、佐島神社の周りは怖いくらい静かで涼しかった。

「いいな、ここ。涼しくて」

「本当つ。美奈子ちゃんの言った通りね」

「でしょ」

一番親しい由紀ゆきの乃にそう言われて、私は胸を張った。他の子も、口ぐちに私を誉める。だからか、私は有頂天になっていた。

「で、何して遊ぶんだよ」

そう新稲が言えば、皆が私を見た。そう、遊びを考えるのは私の役目だ。私が一番、面白い遊びを思い付くから。

私は用意しておいたトランプを出す。そして人数を数えた。……十四人。

「何するの？」

美幸ちゃんが私の手元を覗く。私は笑顔で説明を始めた。

「鬼ごつこの原理なんだけど、まずね、このトランプを一枚ずつ配るんだ。で、全部スペードのカーなの。だけど、一枚だけジョーカーが入ってるんだ。で、そのジョーカーに当たった人が鬼。そしてスペードのカードを持っている子を捕まえるの。でね、スペードのカードの中のクイーン。これは重要ね。ジョーカーはこのカードを持っている人を、最後に捕まえることは出来ないの。でも、鬼は誰がどのカードを持っているか知らないから、慎重に事を図る必要があるの。スペードのクイーンを持っている人を捕まえたらゲーム終了。だけど最後までスペードのクイーンが残ったら、スペード組の勝ち。範囲は神社の敷地内。どう？」

否定する人はいない。よし。

私はカードを配った。でも見ようとする人には嚴重に注意した。

「まだ見ちゃダメ。始まってから。鬼も最初は隠れるか逃げるかしてね。どっちにしる、一分は数えてからスタート」

「なあ、美奈子」

「なあに？」

新稲が私に尋ねる。

「このゲームの名前は？」

「うーん、とねえ」

私は少し考えた。そして、閃いた。

「子ネズミ鬼(ごつこ)」

私たちは十五歳。全員、ネズミ年生まれだ。

「いいじゃん」

新稲がニヤリと笑った。

「ゲーム、スタートっ！！！」

ゲームが始まった。

私は走りながらカードを確かめる。なんと、クイーンだ。スペードのクイーン。

わくわくするなあ。

そう思って走っていたら、私は何かにつまずいて転んだ。顔から、勢いよく。

「っ痛！」

思いつきり打った顔をさすりながら、私は足元を確認した。なんか縄がある。それにつまずいたらしい。そして私がつまずいた拍子に切れてしまった。

「……何、コレ？」

しかし私は、すぐに立ちあがって駆けだした。

ふと、何か聞こえたような気がして立ち止った。耳を澄ますと、ちよつどその時叫び声が聞こえた。美幸ちゃんの声。鬼に捕まっただみたい。

すると、私の前の藪から新稲が現れた。なぜか顔面蒼白にしながら。

「どうしたの？」

私が聞くと、新稲は無言で私の腕を掴んで走った。

「ちよつ。新稲っ!？」

「美奈子。お前さつき人数数えたよな。何人いた？」

「え……？ 十四人だけど」

「おかしいぞ。お前が誘ったのは十三人のはずだ。

お前も含めてな。だって、綾香あやかは今日すぐに帰ったんだから」

私の顔から、血が音を立てて引いた。

「嘘……」

「嘘じゃねえ」

「じゃ、じゃあ……。一人、誰なの？」

「……さあな」

幽霊？ それとも地縛霊？

「美奈子。お前、なんのカード持ってる？」

「……クイーン」

「不味いな」

新稲の言いたいことは分かった。だって、そいつはルールを聞いていたんだ。なら、狙うのは

「安心しろ。お前が最後まで残ればお前の勝ちだ」

だから、と新稲は続けてようやく足を止めた。ここは佐島神社の

本殿。と言つても小さな祠とおさい錢箱があるだけ。新稲は私を祠の前に連れて行つた。

「ここに隠れている。いいな。絶対出るな。きっと、神様が守ってくれるから」

そう言つて、新稲は祠を閉めた。私は一人、祠の中で丸くなつていた。

?

?

?

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。ごめつ」

その瞬間、祠が破られた。

現れたのは、鉈を持った人。

「ユルサナイ。ワガセイイキヲアラシ、シカモキヨウカイセンマデモコワシタキサマヲ。ユルスモノカ。ユルスモノカアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

振り上げられる鉈を見て、私は理解した。

そっか。

幽霊でも地縛霊でもない。

これは、ここの神様。

そして。

怒らせたのは、私



(後書き)

初短編投稿です。

最近暑いので、なんとなく書きたくなつたので書きました。  
駄作、ですなえ。

他にも続きものを書いているので、そっちもよかったらよろしくお  
願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6610u/>

---

ヤツテクル

2011年7月7日03時37分発行